

を保ち得べきに非ず、されば『元史』の此の記事は、只だその一部の記述と見るべきものなるべし。而して各站到米倉を備ふべき規定も、汎く各站を通じて行はれたるものには非ず、何となれば此の後十數年にして蒙古を旅行せる、カルピニ・ルブルキー等の語る處によるも、驛舎の設備は極めて簡單にして、只だ僅に馬匹の供給を爲すに止まりしが如し。數日一斤の食なくして馬を驅りしを記するに考ふるも、其の不備の有様を想見するに足るべし。要するに首都を中心にして之に近きもの、即ち驛傳の必要頻繁なるものには、その設備も比較的充實せられたるべきも、邊鄙の地に至りては、極めて粗略のものなりしなるべし、さて此の如くにして設置せられたる各站は、如何なる機關によりて支配せられたりやを見るに、『元朝秘史』によれば、處々の千戸の長に令して、ジャムチン 札木臣、ウラアチン 兀刺阿臣等を出さしめたりといへり、札木臣とは「ジャムチ」と同語にして站務を司どるもの、兀刺阿臣は車馬を司どるものの謂なり。されば此等の兩者の中の一は前出『元史』の記載に見ゆる百戸に相當するものなるが如く思はるるも實は然らずして、百戸の官はただ站戸の行政の任務にのみ携はり、站の事務に關係する吏員として、別に此等の兩者を置きしものなり。而して兀刺阿臣即ち車馬を司どる吏員の數は頗ぶる多くして、各站毎に二十人宛を置きたりと『秘史』には記せり、されど此の制も各站等しく行はれしや否やはもとより疑問なり。

各站の距離の何程なりしやは今仔細に之を知る可らず、大概の標準は其の當時既に定まりしならんも、然も自然の地勢・物資供給の難易等によりて、もとより一定の距離を保ち得べきに非ず、今其の頃の旅行記等によりて大體の有様を見るに、最も交通少く、従つて最も不便なる土地、例へばアラル海の北方の荒野の如き道筋にても、尙ほ馬行一日程には少くとも一個以上の站ありしを知る、ゴビ沙漠の東邊を通じて、支那と蒙古の首都とを通ずる道筋